

Saiyu Fund

[西遊基金]



寄附に込める想い

遠のいていたつながりを 思い出すきっかけに

内藤啓子さん(旧姓:平松) 学芸学部小学2年課程修了(現在の教育学部)

1954年、長崎大学学芸学部小学2年課程に入学した私は、島原の実家を離れ、長崎市内の学生会館に入寮しました。学生会館は当時、東京や京都など全国に数カ所あった国立の寮です。唯一の女子寮だった長崎の学生会館には、市内の他大学や長崎大学薬学部の女子学生がいました。一番驚いたのは寮のそばに刑務所があったことです。目の前には差し入れ屋さんもあり、「ふくすけ」という名前だったと思います。一杯15円でうどんが食べられたのですが、実家からの仕送りは月3000円、寮費は2700円でした。たまに食べるうどんがとても美味しく、思い出の一つになっています。

私が在籍していた2年課程は1クラス90人で

した。短期間で修了できるとあって人気があったようです。先生は「秀才クラスだ」とおっしゃっていました。私はピンときていませんでしたが、大事にされていたと記憶しています。

私自身、学業にはあまり真面目に取り組んだ方ではなかったと思います。印象に残っていることといえば応用化学の授業です。それは教科書をなぞるだけの授業ではなく、先生が面白いお話を交えながら教えて下さる楽しいものでした。こんな勉強の仕方があるのかと驚きました。また、学業以外では「生活綴り方」という部活に入っていました。

大学修了後は郷里に戻り小学校の教員になりました。大学で得た学びを子どもたちのために活かすことができたのか分かりませんが、先日、教員

になって初めて受け持った、もう60年以上前の教え子の一人が、「先生に」と育てたブドウをわざわざ届けてくれました。

2019年に届いた長崎大学校友会設立のお知らせは、長い年月が経ちすっかり遠のいていた私と長崎大学とのつながりを思い出すきっかけになりました。このお知らせを通して、当時の私たちと同じように、今の若い長崎大学の学生さんが頑張っていることを知り、多くの寄附はできませんが、少しでも彼ら彼女らの役に立ちたいという気持ちになりました。いつまで



内藤啓子さんは1936年生まれ。長崎大学学芸学部修了後は小学校教員に。一人旅が大好きで47都道府県を制覇されました。

続けることができるか分かりませんが、これからもこの思いを届けられればと思っています。



1949年、大村市乾馬場で発足した長崎大学学芸学部(当時の写真)。文教町には1953年に移転しました。



旅先で仲睦まじい内藤ご夫婦。夫の智さんは学芸学部中学2年課程のご出身です。修了後は中学の教員を務められました。

Exchange Meeting

令和5年8月4日 長崎大学佐世保交流会を開催

8月4日、佐世保市を中心に本学の卒業生をはじめ、関連病院、お取引企業代表者などをお招きし、昨年11月の東京交流会に続き、第2回目となる「長崎大学佐世保交流会」を開催しました。

第一部では、河野茂学長が学長任期の6年間で振り返って、情報データ科学部開設など主な取り組みを述べました。

続く講演会では、本学が目標として掲げる「プラネターリーヘルスの実現」に関連して、大学院プラネターリーヘルス学環長の渡辺知保教授が、「プラネターリーヘルスとは何か」と題して講演を行いました。第二部では、西遊基金へ多大なご支援を賜りました。

千住雅弘様(代理:東謙一郎様)への感謝状贈呈式を執行了しました。その後、引き続き交流懇談会に移り、和やかな雰囲気の中、多くの方が親睦を深められ、10月1日付で長崎大学長に就任予定の永安武理事の挨拶の後、盛会裏に閉会となりました。

参加者のアンケートでは、「プラネターリーヘルスの推進を続けて欲しい」「もっと詳しく内容を聞きたい」「長崎大学の取り組みを知ることができてよかった」などの好意的な意見・感想が寄せられるとともに、参加の企業様と本学との新たな共同研究に進展した事例も見受けられ、有意義な交流会となりました。今

後も県内外で継続して開催し、本学に関する様々な情報を発信する予定です。(文中の肩書は交流会開催時のものです)



西遊基金

「西遊基金」は、長崎が長年にわたって培ってきた個性と伝統を基盤に、地域の発展から地球規模の課題まで、種々の問題を解決するための傑出した人材育成を目指した、長崎大学独自の修学支援、さらに教育・研究の幅広い支援を目指した基金です。



西遊基金は1000円からご寄附いただけます。詳しい情報はこちらからご覧ください。

